

学生33人が参加 海洋土木への理解深める

日本理立浚渫協会は2022年12月15日、第27回「うみの現場見学会」を横浜港(横浜市)の新本牧ふ頭地区などで進む「国際海上コンテナターミナル再編整備事業」(発注者:国土交通省関東地方整備局)の現場で開きました。海外からの留学生も含め、14の大学や大学院から33人の学生が参加しました。うみの現場見学会は社会の皆様へ港湾整備の重要性や最新の港湾土木技術などを知っていただき、関心を持ってもらうため2003年から開催しています。前回は2020年2月13日に東京港(東京都)の臨港道路南北線沈埋トンネルで実施しました。今回、コロナ禍の影響で開催を見送ってから2年10カ月ぶりの見学会となりました。

見学会の冒頭、主催者を代表し、あいさつした山下朋之企画広報委員長が「日ごろ建築物など内



見学会に先立ち概要説明を聞く参加者

横浜港新本牧ふ頭地区で うみの現場見学会 開催

陸での工事を見る機会はあるけれども、海の土木工事を見る機会はなかなかないと思います」と述べ、うみの現場見学会での貴重な体験を機に海洋土木への理解が深まることに期待を寄せました。

続いて国土交通省関東地方整備局京浜港湾事務所の渡部武士副所長が横浜港で進めている国際海上コンテナターミナル再編整備事業の概要を説明されました。

横浜港の新本牧ふ頭地区では、国内最大級の水

深18メートル岸壁を備えたコンテナターミナルを新設する事業が進められており、護岸(防波)や防波堤、荷さばき地のほか、道路も新たに整備されます。新本牧ふ頭地区の陸側にある既設の本牧ふ頭地区では、岸壁の再編整備などが行われています。事業期間は2019～2031年度にわたり、総事業費3,100億円が投じられます。大型船の入港や増加するコンテナ貨物の取り扱いに対応し、日本に寄港する基幹航路の維持・拡大を目指しています。

日本の貿易量の99.6%(2018年の港湾統計ベース)が港を通じて行われ、横浜港では東京港(511万TEU)に次いで国内で2番目に大きい304万TEUというコンテナ取り扱い個数ですが、日本全体の基幹港湾で扱っている量を合わせても、上海港(中国、4,201万TEU)や釜山港(韓国、2,166万TEU)などアジアの代表的な港の取扱量と比べ開きがあるのが現状です。

国際海上コンテナターミナル再編整備事業の見学では、概要説明を受けた学生らが船上から新本牧ふ頭護岸(防波)築造工事などの現場を中心に見学しました。海上工事で据え付けられた巨大なケーソンなどの構造物を近くから目の当たりにし、海上工事のスケールの大きさを実感いただくとともに、実現場を見ることの楽しさを肌で感じていただいた様子でした。

見学後は工事関係者との質疑応答が行われました。参加者からは施工の留意点や構造物の寿命、材料の特徴などについての疑問や専門的な内容の質問があり、施工担当者が詳しく説明していました。見学会の最後にあいさつした藪下貴弘企画広報委員会副委員長は「日本の持続可能な社会構築に向け、近い将来、われわれの仲間になってくれることを楽しみにしています」と呼び掛け、次代の海洋土木を切り拓く担い手の誕生に期待を寄せました。参加者からも「参加して良かった」「他の港や海洋土木の工事も見たい」など積極的な声をいただいています。



横浜港で進む国際海上コンテナターミナル再編整備事業



船上から護岸工事の様子を見学



現場見学で乗船した船をバックに記念撮影する大学生ら参加者一行